

2009年11月25日

世田谷区長 熊本哲之 様
世田谷区議会議長 川上和彦 様

DOCOMOMO Japan 代表
鈴木博之

世田谷区民会館および第一庁舎の保存活用に関する要望書

拝啓、時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

本会は、20世紀の建築遺産の価値を認め、その保存を訴えることを目的のひとつとする、世界54カ国が加盟している近代建築保存の非政府国際組織 DOCOMOMO (= Documentation and Conservation of buildings, sites and neighborhoods of Modern Movement : モダン・ムーブメントに関わる建物と環境形成の記録調査および保存のための組織) の日本支部です。

この度、貴区では、区民会館と第一庁舎を含む庁舎の全面的な建替えを検討中であると聞き及んでおります。

ご承知のように、世田谷区民会館(1959年)および第一庁舎(1960年)は、わが国の近代建築を戦前、戦後にわたって長く主導した建築家の一人である前川國男(1905~86年)が設計を手がけた重要な建築であり、同時に、戦後に大きく開花した日本近代建築の実例としての先駆性や、戦後民主主義を背景とする新しい時代に相応しい広場を中心とする空間構成の創造など、数多くの歴史的な意味を有しております。本会は、こうした文化的、歴史的価値を持つふたつの建物について、その保存活用を強く要望いたします。

この建物の歴史的価値は、次のようにまとめることができます。

1. 前川國男の設計による代表作品であること

建築家・前川國男は、大戦間の1928年3月、東京帝国大学建築学科を卒業直後にフランスへと渡り、20世紀を代表する世界的な建築であるル・コルビュジェ(1887~1965年)のアトリエに学びました。1930年の帰国後は、日本近代建築の父とも呼ばれるアメリカ人建築家のアントニン・レーモンド(1888~1976年)の設計事務所を経て、1935年に独立、以後、亡くなるまでの半世紀の長きにわたって、数多くの建築を手がけた建築家です。

その建築作品に対しては、合計6度の日本建築学会賞をはじめとして、日本芸術院賞、朝日賞、毎日芸術賞などを受賞し、それらの一連の設計活動によって、「近代建築の発展への貢献」との評価から、初の日本建築学会大賞も受賞しています。さらに、日本建築家協会会長や世界的な建築家の組織であるUIA副会長を務めるなど、前川は、社会的にも幅広

く活躍を続けました。

世田谷区民会館と区庁舎は、その前川國男が、はじめて手がけた文化施設と庁舎の複合建築であり、前川の代表作品として高く評価できるものです。前川は、ル・コルビュジエに学んだ近代建築の理念を日本へと定着させることをその生涯のテーマにしました。しかし、1950年代の後半に至ると、機能性や合理性だけを追求するだけでは近代建築がやがてやせ細ってしまう危険性を持っていることに気がつき始めます。さらに、日本の気候風土や伝統と調和させることの重要性を自覚した前川は、水平線を強調した大きな庇やバルコニー、外部階段、そして建物が取り囲む広場などによって、新しい公共的な象徴性の実現を図る方法を試みていきます。このような考え方をはじめて用いたのが、この世田谷区民会館と区庁舎でした。そのことは、それ以降の前川の手がけた建築、例えば、「京都会館」（1960年）、「学習院大学」（1960年）、「東京文化会館」（1961年）、「埼玉会館」（1966年）などに、この世田谷で試みられた方法が継承されて大きく展開され、前川建築の主要な特徴になっていったことから明らかです。その意味で、世田谷のふたつの建物は、前川の建築の源流としての価値を持っています。

また、戦後の建築界は、戦前、戦中以来の資材統制によって実現ができなかった本格的な鉄筋コンクリート構造を用いた新しい空間の創造を共通の課題としていきます。こうした中で、世田谷区民会館には折板構造による構造表現主義的な造形が施されました。これは、厳しい予算を逆手に取った先駆的な構造手法の試みであり、ほぼ同時代に竣工したレーモンドの「聖アンセルモ教会」（1956年）や「群馬音楽センター」（1961年）、丹下健三の「今治市公会堂」（1958年）などと共に、この時代を代表する造形です。

2. 世界的な戦後近代建築のテーマであった思想が表現された建築であること

この世田谷区民会館と区庁舎に見られる広場を中心とした空間の造形は、それ自体が、戦後の世界的な近代建築のテーマを受けて構想されたものです。1951年、ル・コルビュジエやワルター・グロピウスなど近代建築を主導した世界の建築家たちが結成した近代建築家会議（CIAM）の戦後はじめてとなる第8回の会議がロンドンで開催され、日本からも前川國男と丹下健三らが参加しました。この大会のテーマが「都市のコア」でした。これは、近代建築が戦後の民主主義の時代の中で、都市の中に人々のコミュニティのよりどころとなる場所を築く方法を議論するために掲げられたものでした。前川は、この会議に参加することでこのテーマに触れ、それを日本へと持ち帰り、自らもその方法を模索していきます。そして、その最初の成果といえるのが、この世田谷区民会館と区庁舎に実現する広場なのです。そこには、戦前の役所建築の持っていた権威主義的な雰囲気をはたき、民主主義の時代に相応しい開かれた公共建築の姿を求めようとする新しい近代建築思想が込められていました。世田谷に誕生したこの小さな広場が、現在においても区民が何気なく立ち寄り、子供たちが走り回る場所として機能している背景には、こうした世界的な近代建築のテーマが流れているのであり、世界に通ずる近代建築の遺産といえるものです。

3. 周辺住宅地と調和する環境を形づくってきた地域の財産としての原風景であること

世田谷区民会館と区庁舎の建設地の周辺は閑静な住宅地です。また、周囲には、松陰神

社や豪徳寺など、緑深い森を有する貴重な自然環境が数多く残されています。こうした中に建設された建物は、その周辺環境の持つ独自の価値を自覚し、それを損ねることなく、健全で適正なスケールとたたずまいを実現させることを目指していました。道路側の敷地をあえて前面広場として残しながら建物の壁面を後退させ、そこに樺を植えることや、正面性を求めず、どこからでもアプローチできるような配置計画、巨大になり過ぎないように高さを抑えたピロティなども、こうした視点から施されたものです。そして、このような建物が、時間と共に成熟し、周辺住宅地と調和する環境を育んできたといえます。竣工後に植えられた樺は、現在では、計画されて植えられたものとはとても思えない大木に育ち、木陰を作り出しています。また、広場には休日でも子供たちの遊びまわる歓声が響き、散歩に訪れてゆっくりと時間を過ごす人々の姿が絶えません。それらは、この建物がそこにあることによって長く守り育てられてきた地域の財産としての原風景といえるものです。それは、多くの住宅地を区内に持つ世田谷という地域の特質を区民と共に理解し、他の区に見られるような巨大な庁舎や区民会館を求めてこなかった区の高い見識に支えられていたのだと思います。予定されている新しい大型の庁舎建築の建設は、そうして守られてきた環境を激変させ、地域の財産である原風景を失うことになるのではないかと危惧されます。むしろ、この建物を保存活用しながら、原風景を次の世代へと継承する道筋を求めることが、地域の財産をより高めることにつながると思います。

以上のことから、世田谷区民会館と区庁舎は、さまざまな価値を有する貴重な建築文化遺産であると共に、健全な生活環境を育成してきた地域の財産でもあり考えられます。この建物については、すでに、日本建築学会や日本建築家協会からも保存要望書が提出されております。しかしながら、貴区が組織した「世田谷区本庁舎等整備審議会」では、これらの要望書でも触れられている建築的な価値についての議論はほとんど行われず、本年8月13日付で公表された答申においても、設計者・前川國男の名前すら記載されておりました。環境を形成する建築文化への理解が市民にも深まりつつある中で、そのことを素通りした議論によって、かけがえのない建物の将来が決まってしまう事態に、本会としても危惧を抱かずにはられません。同時に、上記に記しましたように、現在まで大切に守られてきた住宅地域における中庭を中心とする公共空間を、過大とも思える機能的な要求のみによって失い、なおかつ、4万5千㎡もの規模の建築をそこに建設することが、果たして妥当なのかどうか、についても、議論が尽くされているとは思えません。

つきましては、良好な状態での保存活用の方途を見出し、このかけがえのない建物をその周辺環境とともに後世へと継承されますよう、格別のご配慮を賜りたく、ここにお願い申し上げます。

なお、DOCOMOMO Japanはこの建物の保存活用に関して、建築の専門家という立場から、できる限りの協力をさせていただき所存であることを申し添えます。

敬具